

## 中島敦における知識人の問題

——あらたな「山月記」論をめざして——

柳 井 宏 夫

「山月記」〔文学界・一九四二年二月〕研究は、佐々木充が「山月記」論——『古譚』の世界——<sup>1)</sup>において、「人虎伝」との比較研究ではなく、「古譚」四篇（狐憑・木乃伊・山月記・文字禍）の一つとして位置付けて考究して以来その様相を変えた。そして

佐々木はその論で「古譚」四篇の一つの特徴として「つねに〈文字・言葉〉をめぐる展開すること」を指摘している。

しかし中島敦における「文字」への拘泥は「古譚」四篇に限らない。この拘泥は佐々木が「古譚」四篇に共通する特徴とした以上に、中島敦にとつては根深い問題であった。

中島敦の「文字」に対するこの拘泥とは、すなわち「文字」への懐疑に他ならない。「古譚」四篇よりも前に発表された「虎狩」〔中央公論〕新人賞選外佳作・一九三四年七月。のち『光と風と夢』筑摩書房・一九四二年七月一五日）においては、主人公の旧友が「感覚とか感情ならば、うすれることはあつても混同することはない

のだが、言葉や文字の記憶は正確なかはりに、どうかすると、とんでもない別の物に化けてゐることがある。」と述べている。そして中島敦は、「文字」に囚われてしまうことを「知識人の通弊」としているのである。

右における知識人という語は中島敦の作品の随所に見られる。そして中島敦は知識人に対して必ずしも肯定的な見解を示してはいない。なぜなら知識人とは「文字」によつて形成されるものであるが、一方では「文字」に支配されてしまうものでもあるからだ。つまり右の「知識人の通弊」とはいわば「文字」の弊害ということである。

この「文字」の弊害についてはいくつかの例が挙げられている。たとえば「文字禍」ではエリバ博士が「文字の無かつた昔、ビル・ナピシユチムの洪水以前には、欲びも智慧もみんな直接に人間の影としか、我々は知らない。」と述べており、「北方行」〔成立年月日未詳。のち『中島敦全集』第三巻収録・筑摩書房・一九四九年六月

一〇日)では「彼は、ものに、現実、に、直接触れることができない。彼がものに触れ、ものを見、又は行為する場合、それは、彼の影がものに触れ、ものを見、又は行為するのである。」と記されている。また同じく「北方行」では「いつのころからか、彼は、自分と現実との間に薄い膜が張られてゐるのを見出すやうになつた。そして、その膜は次第に、そして、つひには、打破り難いまでに厚いものになつて行つた。彼は、その、寒天質のやうに視力を屈折させる力をもつ、半透明な膜をとほしてしか、現実を見ることができなくなつて了つた。」と記され、また「かめれおん日記」(成立年月日未詳。のち『南島譚』新鋭文学選集2収録・今日の問題社・一九四二年一月一五日)においては「みんなは現実の中に生きてゐる。俺はさうぢやない。かへ、るの卵のやうに寒天の中にくるまつてゐる。現実と自分との間を寒天質の視力を屈折させるものが隔ててゐる。直接そとのものに触れ感じることが出来ない。」とされている。つまりいずれの例も現実と関わる際に「文字」が介在することによつて、現実をそのまま受け止めることができないうということであり、中島敦は「文字」に関わることで生じる違和感を知識人特有のものとしてしているのである。

「北方行」においては「あらゆる場合を通じて、現実の生活を、感情(肉体)がうべなはうとしないやうな抽象的理論に屈従せしめて、自らを悲惨にしてゐる知識人共は晒ふべきかな。」という知識人への嘲笑がみられるが、これはまた中島敦の心中の一部にあつた自嘲でもあるだろう。前述の通り、知識人は「文字」によつて形成される。中島敦はこの「北方行」において「抽象的理念」

を信奉し実践しようとする知識人の過度の観念性を摘発しているのである。

そもそも現実と「文字」との関係は恣意的なものである。「悟浄出世」(成立年月日未詳。のち『南島譚』新鋭文学選集2収録・前出)においては、現実を離れて「文字」を知つたがために「文字」に囚われた悟浄の苦悩が描かれている。悟浄は「今迄纏まつた一つの事と思はれたものが、バラ／＼に分解された姿で受取られ、その一つの部分々に就いて考へてゐる中に、全体の意味が解らなくなつて来る」としているのである。全ての事物が「バラ／＼に分解された姿で受取られ」という中島敦が言うところの「分析病」(「文字禍」)は、すでに挙げたエリッパ博士のみならず、現実としては「狼疾記」(成立年月日未詳。のち『南島譚』新鋭文学選集2収録・前出)においても「文字」に親炙しすぎた結果として描かれているが、悟浄の「分析病」は、他の妖怪には「因果な病」と映じ、「文字などといふ死物で書留められる訳がない。」と侮蔑される。そして悟浄の「憂鬱」は「文字を解するため」と考えられてしまう。妖怪たちに嘲笑されるだけの悟浄が、人間の社会における知識人のアレゴリーであることは疑いない。そこには周囲に理解されることのない知識人の孤独と悲哀を読みとれることもできる。

しかし従来の「山月記」研究においては、中島敦に明確に意識されていたこの知識人という視点は看過されていた。山下真史は「化虎を詩が書けなくなつた状態の比喩として捉えると、その理由を『山月記』の中に探すのが難しいことに気づくだろう。」<sup>(1)</sup>としているが、「山月記」を知識人という観点から照射すれば、李

徴が虎になり詩が書けなくなる理由を見いだすことができるはずである。

そこで本稿においては、この知識人という視点から「山月記」について考究する。そして知識人の問題から、今日まで「山月記」研究において論点とされてきた二つの大きな問題、すなわち李徴が何故に虎に変身したかという点と、李徴が吟じた漢詩における「欠ける所」とは何かという点についても併せて論究してゆく。

## 二

「山月記」の冒頭には「隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね」とある。「名を虎榜に連ね」ということは、自らの名を「文字」化することであり、唐代の知識人にとっては、自分を「文字」化することこそが、名を成すこと、すなわち出世を意味した。つまり「虎榜」(圈点柳井)の虎とはあくまでも出世の象徴としての「文字」の虎であり、李徴は科挙に合格した時に一度虎になっているのである。そして李徴はこの時から一層「文字」による支配を受けることになる。ここでの「文字」は権力を意味する。

「文字」の虎となった李徴の願望は、「文字」社会の中核である長安で成功することであった。李徴は常に長安を基軸に思考する価値観を持っている。その端的な例が官職であり、後の詩業においても同様である。つまり李徴にとってはいずれれを選択しようとも長安での成功こそが「文字」社会での成功なのである。

しかしながら李徴は「江南尉」としての地方勤務を余儀なくさ

れ、官途において失意に陥る。そして李徴は「己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様を」夢想し「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとした」のである。李徴は詩家として詩文というやはり「文字」に生きる途を選ぶ。詩家は本来は芸術として「文字」を扱うものである。しかし、ここでもやはり李徴の「文名は容易に揚ら」なかつた。さらに数年後、李徴が「己の詩業に半ば絶望し」「妻子の衣食のため」に再び就いたのは、やはり官吏という「文字」を用い、「文字」によって管理される職業であつた。しかしその地位もかつての同輩よりはるかに低く、李徴はここでさらに矜持を傷つけられる。つまり李徴は長安からはるかに遠い地方にいながらも一貫して「文字」の世界で苦闘してきたのである。

その李徴が公用で「汝水」のほとりに宿つた時、戸外で自分を呼ぶ声を聞き、それを追つて闇の中へと駆け出す。そして気がつくくと、李徴の外形は虎になつていた。李徴にこの大きな転機を齎したのは「文字」による官の命令ではなく不可思議な声であつた。

この声に関しては、小澤保博は「李徴は、自分自身の精神の内部の声によつて導かれ異類に変身する」としている。また、奴田原論は声を「自己の内なる呼び声」とした上で、「現実の生活に忠実であろうとし、自己の目指していたものを忘れて生きようとする李徴を、もう一人の彼は闇の中へと導き出した」としている。そしてそれは「詩作への渴望と同時に、引き裂かれた精神の統合を欲する無意識の行動であつたかもしれない」とし、さらに李徴が虎になつた理由を「芸術家として生きんとしながらも生き得な

かった男の「狂気」であるとしている。

両者にみられるように、李徴を呼んだ声を李徴自身の内面の声とする見解は比較的近年の研究の動向である。しかし本稿ではさらにもう一步、その内面の声の本質に踏み込んで考えることにする。

李徴を呼んだ声はたしかに李徴自身の内面の声であった。前述の通り李徴の「文字」社会での成功への欲望はきわめて強かった。しかし幾度も重なる李徴の失意を考えると、一方では李徴は無意識の内に「文字」の支配する世界からは決定的に縁を切りたくなっていたと考えても不思議ではない。

つまり李徴を呼んだ声とは、「文字」社会で疲弊しきった李徴が、その桎梏から身をはがそうとする、悲鳴にも近い自らの無意識の内面の声であった。

李徴が変身する虎とは「文字」支配の世界からの脱却の象徴であり、「文字」社会で名をあげることに腐心していた李徴は、内からの無意識の声に呼ばれることで、「文字」社会から離れ、虎の世界という「文字」の通用しない世界に身をおくことになるのである。その意味で、虎は小森陽<sup>9)</sup>が指摘するような出世の象徴としての虎でもなく、川村湊が論中でいう「文字の獣」<sup>10)</sup>とはまったく対極にあるのである。

また語り手は李徴の変身を「発狂した」と述べているが、実のところ李徴は「発狂」などしてはいない。李徴自身も「即席の詩」において自らを「偶因狂疾成殊類（圍点柳井）」としているが、李徴は外形が虎になった後にも、強烈な絶望に陥る一方で冷静な自

己省察を繰り返しているからである。李徴にとつての「発狂」とは「文字」社会から切り離されることであつた。そして李徴の化身は「文字」支配による競争社会からの脱出を無意識に希求する内面の悲鳴に従つたものである。「文字」社会からの脱出、それが李徴の変身の理由である。

ところで李徴を呼んだ声は「文字」の世界に疲弊しきった李徴にとつては救済の声でもあつた。なぜなら李徴が本当の虎になりきることができるなら、人間としての思考や倫理といった「文字」社会の全てのがらみから解放されるからである。つまり李徴にとつて「文字」と人間であることは不可分なのであり、「異類の身」に成り果てることでしか「文字」の呪縛から我が身を解放することはできないのである。

しかし「文字」の世界の緊縛から逃れたはずの李徴は「何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。」と言いながらも、自分の運命を分析しようとする。そもそも運命というものは分析できないものである。だが李徴はそれを執拗に繰り返している。そして李徴は虎になつた理由を「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」や「飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる」ことに求め、安らぐことがない。このように己の運命を分析し納得しようとするところに、まさしく「知識人の通弊」がある。

袁俊に再会した外形が虎になつた李徴は、すでに「文字」を書

くことができなない。「文字」が書けないということ、それは知識人としての死である。しかし本当の虎になりつつあっても、李徴は「一日の中に必ず数時間は、人間の心が還つて来る。さういふ時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪へ得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。」と言う。のみならずさらに李徴は「己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己は、あは、せになれるだらう。だのに、己の中の人間は、その事を、此の上なく恐しく感じてゐるのだ。」と言う。李徴は「文字」の世界から離れても、人語を通じて「文字」に執着している。李徴にとつての人語は失われた「文字」との紐帯である。李徴は「文字」社会との紐帯を完全に失えば幸福だと言いながら、それを失うことの恐怖を自覚しているのである。ここには李徴の「文字」に対する希求と背反というアンビバレンツな感情が見られるのである。

また李徴は、本当の虎になりつつあり「文字」から離れることになつてすら、袁倓に詩を伝え吟ずるほど「文字」への希求を捨てきれないのである。では、そこまでして「文字」を欲求する李徴が果たして「文字」に徹しきれていたたのであろうか。それは李徴が吟じた「旧詩」と「即席の詩」の評価をめぐる問題となつてくる。

### 三

「山月記」に設定されている「天宝」（七四二―七五五）という時代は、唐詩の最も華やいだ時代である。李徴が李白（七〇一―七

六二）、杜甫（七一二―七七〇）、王維（七〇一―七六二）と同時代人であることは特に確認しておく。

当時の中国に関して村上哲見は「唐宋の詩人や文章家というのは、いくらかの例外をふくみながらも、多くの場合、一方では科挙の試験を経た官僚」であり、「国家行政の中枢を担当する官僚たちが、同時に詩や文章＝文学の世界における代表的作者群でもあった。」と述べている。前述の三詩家たちを例に挙げても、当時、理由は多様であるにせよ、官僚と詩家とはきわめて近接していたのであり、李徴の官吏から詩家への転身は決して特別なものではない。李徴は「文字」社会において成功できれば、官僚であつても詩家であつてもよかつたのである。その意味では、関良一が「有名病」と評していたように、李徴はいわば安易に官僚か詩家かの選択をしていたといえるのである。

しかしここで問われるのは、李徴は自分の才能に自信を持つ一方で、たえず「才能の不足を暴露するかも知れない」と自分の才能に自信を持っていない点である。そこには李徴が真剣に「文字」社会で生き抜いてゆこうとする決意の不足、すなわち「文字」の前での弱さがみえてくるのである。そのために李徴は今一歩踏み出せず「文字」社会に強く魅せられているにもかかわらず、「文字」社会から脱出せざるをえなくなつてしまふ。

李徴は「詩の鬼」になるには「文字」の前で決定的に弱かつたのである。李徴は「文字」と真剣に向き合う強さを欠き、「文字」から逃げてしまふのである。この弱さは一度は官途を捨てた理由にも共通する。それゆえに李徴がいかに「己の詩集が長安風流人

士の机の上に置かれてゐる様を「夢見続けても、それは単なる夢にすぎない。李徴は自分自身を「詩人になりそこなつて虎になつた哀れな男」と言うが、その内実は一流の詩人になれず、「文字」社会での成功への欲望を持つ一方で、そこからの脱出を無意識に希求し、虎に変身せざるをえなかつたということなのである。

つまり前章で述べた、李徴が虎に変身せざるをえなくなる理由と、その詩に「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所がある」理由は、「文字」の前での弱さということで根本的には通底するのである。

前述の通り、李徴はかつて「文字」社会の住人であり、そこが苦闘の場であつた。しかし李徴は「文字」との葛藤があつても大成することはできなかった。それは李徴が「文字」に支配されているばかりで、李徴が自分自身の個性をいかし、主体的に自由自在に「文字」を使いこなすことができなかったからである。それどころか李徴は「文字」にふりまわされ、「文字」をもてあまし、結局は「文字」の主人たりえなかつた。なればこそ、袁俊をして「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所がある」と感ぜしめる詩しか吟じえなかつたのである。これは李徴の吟ずる全ての詩において共通であるはずである。「山月記」においては、「旧詩」と「即席の詩」があるが、いずれにおいても差異はないはずである。袁俊は直接批評を下してはいないが、李徴の「旧詩」だけではなく「即席の詩」にもやはり「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所がある」のである。<sup>(18)</sup>

かつて李徴は詩において名を成そうとした。しかし人間であつ

たころの李徴の「旧詩」は「まだ世に行はれてをらぬ」ものであつた。親しい袁俊にしか「旧詩」と「即席の詩」を吟じえなかつた。李徴は「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の所為などではなく、詩を人前に公にする自信がなかつたのではないだろうか。自らの詩への自信のなさは、とりもなおさず李徴の「文字」の前での弱さに起因するといつてよい。李徴の「胸を灼かれるやうな悔」とは、自分の「文字」の前での弱さに対する後悔を指しているのである。

そして虎になつた李徴は、もはや筆が執れず、やはり己の詩を公にすることができない。その李徴は「たとへ、今、己が頭の中でどんな優れた詩を作つたにした所で、どういふ手段で発表できるように。」と詩を「文字」で発表する手段がない自分を嘆き悲しむのである。<sup>(19)</sup>

それでも虎になつた李徴は己の詩を「伝録」しようとする。これはもはや自ら書くことが不可能な李徴が、人の手を借りてまで詩が「文字」化されることに未練があるからである。おそらく李徴は完全に本當の虎になりきつてしまふまで、この「文字」への強い未練は断ち切れないであろう。しかし、すでに人間ではない李徴の詩は決して世に出ることはない。李徴は袁俊に「己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。」と己が涙をみせたことを語るが、李徴は強い未練を残しつつも、永久に「文字」社会から追放されてしまふのである。

このような李徴が最後に放つ「咆哮」は「文字」社会との永遠の決別の表明である。李徴のこの「咆哮」はすでに「文字」でも

「人語」でもない獣の叫びである。李徴が「再び其の姿」をみせることがなかったのは、「文字」社会と完全に決別したからである。李徴は本当の虎になることによってようやく「文字」の呪縛を振り払ったのである。

#### 四

「山月記」における二つの大きな問題、すなわち何故に李徴が虎に变身したかということと、李徴の詩にみられる「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所」が生じることの理由を、知識人という観点から考究する時、そこには「文字」の前での弱さから「文字」に対して強く牽引される一方で、「文字」からの脱出を希求するというアンビバレンツな感情を抱えた李徴の姿が浮き彫りにされる。「文字」支配の世界に対する懐疑は、根底においては、李徴のみならずエリバ博士や悟浄にも共通している。しかし李徴は、エリバ博士や悟浄のように、「文字」そのものへの懐疑を表面化させてはいない。なぜなら李徴にとって「文字」とは疑うことなき出世の手段であり、「文字」の世界で名を成すために必要なものとして何よりも重く捉えられているからである。「山月記」における知識人である李徴は、必ずしも「文字」に対して強い決意を持たないままに、「文字」社会における立身出世の道を目指し、その結果、立身出世の挫折に苦悩し、過剰な「分析病」に陥る。李徴の「分析病」はエリバ博士や悟浄のように外界の対象が分解して捉えられるものとは異なる。李徴の「分析病」は、あくまでも自らの内面に向けて執拗に加えられてゆくかたちのもの

ある。

そしてこのような李徴には、中島敦という一人の知識人の姿が色濃く投影されているのである。つまり李徴のような人物造型が可能であるということは、すなわち中島敦が自分自身に対しても「知識人の通弊」を自覚していたはずだということである。

「文字禍」には「文字に親しみ過ぎて却つて文字に疑を抱く」とは、決して矛盾ではない。」と述べられているが、中島敦は「文字」を熟知し、同時にその一方で「文字」の功罪をよく知っていた。知識人は「文字」によって育てられるが、反面において「文字」は知識人を滅ぼすものである。このような「文字」に対して強く牽引される一方で、「文字」からの脱出を希求する知識人を造型する中島敦自身はいかなる経路をたどるのであるか。その一端を南洋行きに見てみることにする。

一九四一年七月六日、中島敦は南洋庁国語教科書編修書記としてパラオ島に着任する。中島敦のこの南洋行きには経済上の問題の解決と宿痾の喘息の療養、そして何よりもいわゆる文明から離れた南の世界への憧憬があった。

しかしながら「環礁——ミクロネシア巡島記抄——」（成立年月日未詳。のち『南島譚』新鋭文学選集2収録・前出）中の一作品である「マリヤン」においては、日本内地で女学校に通ったことがあるパラオの女性マリヤンが厨川白村『英詩選釋』とピエル・ロティ『ロティの結婚』を持っていることに、中島敦は「少々いたましい気」を感じるようになる。なぜならばそれは当時日本の植民地であったパラオにおいて現地の住民が無自覚に文明に同化させら

れていることを表すからである。ここでいう中島敦の文明とは、西欧文明の影響を受けた日本内地の文明であり、南洋における中島敦はこの文明観を保持している。当然ながらその文明には「文字」だけが含まれるわけではない。

このマリヤンとの出会いは、作品中に「H氏」として登場する土方久功（彫刻家・画家・詩人・民族学者）のパラオでの住居を訪ねた時のことであった。土方久功は中島敦がパラオに着任した同月発足の「南洋画壇」の副会長であり、現地にいる日本人の画家など単身者に慕われた。もともと広く芸術に親炙していた中島敦はそこでの交流を楽しんだと思われる。

植民地教育の実態と役人生活の窮屈さに失望していた中島敦と、次第に開発が進行し、南洋らしいパラオが破壊されていくことに落胆していた土方久功とは厚い親交があった。しかし中島敦と土方久功の西欧文明を媒介とした場合の南洋行きには差異があり、土方久功は西欧の近代を介在させず、直接南洋の原始に飛び込んだ一方で、中島敦は西欧の近代に強く影響されていた。中島敦はこの土方久功と共に翌一九四二年三月四日にパラオを出発し、一七日に横浜に到着することになる。<sup>(20)</sup>

中島敦の日本への帰還の主たる理由は、喘息の悪化と、南洋へのオリエンタリズムの破綻であった。中島敦のパラオへの渡航と日本への帰還は、「山月記」における「文字」社会からの脱出を希求しながらも「文字」から離れることができない李徴と重ね合わせると奇しくも象徴的である。中島敦は南洋に文明ではない世界を求めていた。しかし文明はすでに中島敦をパラオまで追いか

けてきていたのである。

中島敦は「南洋群島の文化の中心地」(マリヤン)であるコロルから、山口比男に「自然の眺は豊かですが、どうも、まだ文化が恋しくて困ります。いつそパラオが、ずつと未開の島だつたら、却つていいのですが。」(一九四一年七月一日書簡<sup>(21)</sup>)と述べている。

ここには中島敦における文化、つまり本稿で述べてきた意味での文明への執着とそこから脱出の希求がみられるのである。あるいはそれは当時のコロールという、中島敦が「此の街にあるものは、唯、如何にも植民地の場末と云つた感じの・頹廢した・それでゐて、妙に虚勢を張つた所の目立つ・貧しさばかりである。」(マリヤン)と形容する植民地における中途半端な刺激を与える都会に中島敦がいたことに起因するかもしれない。しかしいづれにせよ、中島敦はどんな僻地にあつても日本内地の文明との紐帯を断ち切れなかつた。<sup>(22)</sup>

「環礁」の一作品である「真晝」では「人工の・欧羅巴の・近代の・亡霊から完全に解放され」ることを欲求しながらも「ゴーンの複製を見てをるだけだ。ミクロネシアを見てをるのでもない。ロティとメルヴィルの書いたポリネシアの色褪せた再現を見てをるに過ぎぬのだ。」と、南洋にいながらも南洋の現実を見ず、日本内地で得た教養から逃げきれないことを心中思惟する人物が造型される。この中島敦らしき人物は結局「東京の歌舞伎座の、(それも舞台ではなく)みやげもの屋(あられや鈴や似顔絵やプロマイド等売る)の明るい華美な店先と、其の前を行き交ふ着飾つた人波」など「こんな意味も内容も無い東京生活の薄つぺらな一断

「面」を「太平洋の波に囲まれた小さな島の・椰子の葉で葺いた土民小舎の中で、家の周囲にズシンと落ちる椰子の実際の音を聞いてゐる時に、突然」思い出しており、このように日本内地の風俗を引きずっているのである。

しかしその反面で中島敦はやはり南洋に文明のない世界を求めていた。中島敦は「僕は今迄の島でヤルトが一番好きだ。一番開けてゐないで、ステイヴンスンの南洋に近いからだ。」(園点柳井・一九四一年一月一日・中島たか宛書簡<sup>26</sup>)と述べている。中島敦は南洋の島々に日本内地にはない南洋オリエンタリズムとしての未開を求めていたのであり、文明とは決別した生活を送ることができるといふ期待を抱いていたのであろう。しかし中島敦の南洋において文明と関わりのない生活を送るといふ期待は夢想に終わった。太平洋の島々は、中島敦が訪れた時点では既に列強の植民地とされており、植民地としての制約はあつても、欧米の文明の影響を受けていない所はなかった。パラオもその例外ではなく、一六世紀ごろよりヨーロッパとの接触があつたが、宗主国が一八八五年にはスペイン、一八九九年にはドイツ、一九二二年には日本(一九四五年)と交代している。いわば文明が中島敦を待ち構えていたという一面もあるのだ。

つまり中島敦は期せずして、南洋においては文明というより広い文脈の中で、李徴と同じ牽引と脱出を実践する結果となつたのである。<sup>(27)</sup>

南洋に行く前の中島敦は「光と風と夢」(原題「ツシタラの死——五河莊日記」。「光と風と夢」と改題し「文学界」一九四二年五月号に掲載。

のち『光と風と夢』所収・前出)において、ステイヴンスンに自分を仮託し「それが記念碑として優れたものか、どうかは別として、私は、兎に角書けるだけのものを書きつくしたのではないか。無理に、——この執拗な咳と喘鳴と、関節の疼痛と、咯血と、疲労との中で——生を引延ばすべき理由が何処にあるのだ。病気が行方への希求を絶つて以来、人生とは、私にとつて、文学でしかなくなつた。文学を創ること。それは、欲びでもなく苦しみでもなく、それは、それとより言ひやうのないものである。」と語らせている。ここには、知識人の「文字」に対する一途な意志と情熱が見られる。

そして中島敦は南洋においても、やはり「文字」を書くことに強い執着を持っていた。一九四一年一月九日の中島たか宛書簡では、原稿用紙を携えて南洋にやつてきたことを書き記している。そしてそこにはまた、「暑さのせむにするのは卑怯かも知れないが、実際、この気温ではオレには何一つ、仕事が出来ない。」<sup>(28)</sup>「でも十月の終になつても、一枚も書けなかつた時は、さすがになさけなかつたなあ！ 自分の不甲斐なさに、口惜し涙が出たよ。」と語られている。

中島敦は暑熱や体調不良に悩まされながらも、作品を残すべく真摯にかつ厳しく自分と向き合っていたのである。作品を書きたいが書けないという気持ちは、晩年の中島敦にはきわめて強かつた。そこには中島敦のような真摯さや厳しさを欠いているにしてもなお作品に拘泥し続ける李徴と、中島敦が重なり合う姿を見いだすことができるのではないだろうか。李徴は「文字」を出世の

手段として捉えていたとしても、長年執着を持ち続けた「文字」に愛情を感じていなかったはずはない。

中島敦の一連の作品及び書簡には、「文字」によって形成される一方で、常に「文字」への懐疑を抱き、「文字」に牽引されながら、そこからの脱出を欲望するという葛藤に苦しむ知識人が描かれている。この知識人の創出にはやはり知識人である中島敦自身が反映されている。「山月記」は知識人の「文字」社会への希求と背反という宿命を剔抉した作品である。

(丁)

注(1) 初出は「国語国文研究」第三号(北海道大学国語国文学会・一九六五年九月)。のち「山月記」——存在の深淵——と改題し「中島敦の文学」(桜楓社・一九七三年六月一日)に所収。

(2) 「古譚」は当初「文学界」(一九四二年二月)に収録された二篇(文字稿・山月記)であった。しかし同年「光と風と夢」(筑摩書房・一九四二年七月一日)に四篇(狐憑・木乃伊・山月記・文字稿)として改めて収録された。本稿では「古譚」を後者の四篇として取り上げることにする。また「狐憑」「木乃伊」はこの「光と風と夢」が初出である。

(3) 本稿における「文字」とは、表音文字・表意文字の双方を含むものとする。また本稿では、「言葉」は意味を持つ音声であり、「文字」に準ずるものとして捉え、「文字・言葉」を「文字」に統一する。

(4) 山下真史「中島敦『古譚』論」(『国文白百合』・白百合女子大学国語国文学会・一九九八年三月号初出。のち「中島敦とその時代」(双文社・二〇〇九年一月四日)に所収。

(5) 小森陽一「自己と他者の〈ゆらぎ〉——中島敦の植民地体験」(『ゆらぎ』の日本文学)・日本放送出版協会・一九九八年九月三日)は「進士試験の合格者の名前を掲示する札は『虎榜』と書き記

されているのだ。科挙に受かった者たちは『虎』に喩えられているのである。」と指摘している。本稿ではさらにこれを「文字」の虎として考える。

(6) 渥美秀夫は「山月記」再論」(『愛媛国文と教育』第三十六号・愛媛大学教育学部国語国文学会・二〇〇三年二月二〇日)において「汝水」を「號略・長安を一つ視野中に遠望」できる場所であると、李徴は「妻子のいる號略へも風流人士の長安へも進めず、詩業を貫くための他の進路も思い描けず、進退ここにきまわれりの感を深くしたことだろう」と指摘している。

(7) 小澤保博「中島敦『山月記』を読む」(『琉球大学教育学部紀要』第六八集・琉球大学教育学部・二〇〇六年三月)

(8) 奴田原論「無明の叢——中島敦『山月記』論」(『文教大学国文』第三十五号・文教大学国文学会・二〇〇六年三月。奴田原の「理想と現実」は、それぞれ詩家となることと官吏であることである。しかし本稿では、「文字」を扱う詩家や官吏は現実で、広く「文字」の世界からの脱出が理想であると考える。

(9) 小森陽一注(丁)前掲論。

(10) 川村湊は「文字の禍福——中島敦の『虎』」(『幻想文学』二十九号・国文社・一九九〇年五月)において、李徴の変身後の「虎」を「虎はその体に刻印された黒と黄色の文様によって、まさに『文字の獣』であったのではないだろうか?」とすると、李徴が変身したのは、まさに『文字』なのであり、この文字に憑かれ、文字を並べ、文字をいじりまわすことによって己れを失ってしまった男は、最終的に『文字』そのものに姿を変えてしまったといつてよいのではないか。」と述べており、この見解は「狼疾正伝 中島敦の文学と生涯」(河出書房新社・二〇〇九年六月二〇日)において一貫している。しかし本稿ではあくまでも「文字」社会からの脱出の象徴と考える。

(11) 松村良は「エクリチュールの復讐——中島敦『山月記』」(『昭和文学研究』・一九九四年二月)において「袁徳と対峙している『人間』としての李徴の実体が、(声)としての存在であることを明瞭

に示している。李徴は「人語」を話す『虎』ではなく、ただ（声）だけの存在としてそこにある。」としているが、本稿では「見えざる声」は「人語」と解釈し、「人語」と「声」は「言葉」と同質のものであると考える。

(12) 村上哲見『科挙の話 試験制度と文人官僚』（講談社現代新書・一九八〇年九月二〇日）

(13) 唐・宋の科挙や官制については、長谷川達哉『山月記』再読——科挙の門をくぐった男・李徴の物語——（中央大學國文・中央大學國文學會・二〇一一年三月）に詳述されている。

(14) 関良一『ギリシヤ的叙情詩』と『山月記』について（言語と文芸）・大修館書店・第四二号・一九六五年九月）

(15) 勝又浩は『中島敦 作家と作品』（有精堂・一九八四年七月二〇日初出。のち『中島敦の遍歴』筑摩書房・二〇〇四年一月二〇日に加筆修正して収録）において、李徴の詩に「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所がある」理由を「つまるところは李徴のこの気の弱さ・信念の弱さなのである。」とし、李徴は「詩の鬼にこそならなければならなかったのである。」としている。

(16) 勝又浩注(15)前掲論。

(17) 初志貫徹という意味においては、李徴は「名人傳」（『文庫』・三笠書房・一九四二年二月）の紀昌とは対照的である。

(18) 作品中では、李徴がかつて実際に書いた「旧詩」は「文字」として明示されておらず、一方で哀惨の前で吟じた「即席の詩」だけが「文字」として明示されているという皮肉な転倒がなされている。これは、書かれなかった「文字」と書かれた「言葉」ともいえる。

(19) 松村良注(11)前掲論。松村良は『山月記』テキストは「書く行為」を剥奪され（書かれたもの）から拒絶された存在である「虎」へと反転させることで、彼が永遠に失ったもの——エクリチュール——のあり方を浮かび上がらせているのである。」と指摘している。

(20) 『土方久功年譜』（『土方久功著作集』第八巻・三一書房・一九九三年一月三〇日）

(21) 洪瑟君「光と風と夢」の一試論——『光』をめぐる——（『国文学攷』・広島大学国語国文学会・二〇〇八年二月）においては、中島敦の歌稿『Miscellany』に基づき、中島敦は印象派や後期印象派（ゴーガンなど）に関しても知識を持っていたとしている。

(22) 中島敦と土方久功の交流については、岡谷谷二「パラオ好日——土方久功と中島敦」（『新潮』二〇〇二年五月号。のち『南海漂蕩——ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』・富山房インターナショナル・二〇〇七年一月二十九日に加筆修正して収録）に詳しい。

(23) 『中島敦全集』第三巻（筑摩書房・二〇〇二年二月二〇日）

(24) 中島敦は南洋において、文明と文化とを区別せずに用いている。

(25) 杉岡歩美「中島敦にとつての『南洋行』——昭和初期南洋という『場』」（『同志社国文学』・二〇〇八年三月）において、中島敦と土方久功を対比しながら「中島と土方を近くしたのは、『未開人』への憧れ、共鳴であった。そして、文明を懐疑しつつ『文明人』の意識から抜け切れなかった」という「共通点」を指摘している。

(26) 注(23)前掲書。

(27) 中島敦研究においては、南洋体験が「狼疾」にいかに影響しているかがしばしば論じられるが、この点については別稿を期したい。

(28) 注(23)前掲書。

(29) 注(23)前掲書。

なお、本文の引用は、全て『中島敦全集』（筑摩書房・二〇〇一年一月一〇日・二〇〇二年五月二〇日）に依った。引用に際しては、圏点はそのままで、旧かなづかいで、適宜旧字体を新字体に改めた。

また「土民」など現代の判断基準では差別用語とされる単語が存在する。しかし筆者自身が差別を助長することを意図していないと想定され、また「土民」という単語が使われていたこと自体が重要ではないかと考えられるので、本稿ではそのまま用いることとした。